

高等学院
応用心理学の
リスボンです。カンファレンス
2011年9月

個人とプロのアイデンティティのパラドキシカルなダイナミクス。

ピエール・タップ¹

Samuel Antunes²

概要

パーソナル・アイデンティティとは何か、プロフェッショナル・アイデンティティとは何か。プロフェッショナル・アイデンティティはどのように構築され、各被験者の個人的なアイデンティティとどのように関連しているのか？著者は、個人のアイデンティティが幼少期や青年期から構築される限りにおいて、発達心理学（Zazzo, Malrieu, Wallon, Cloutier）の研究に基づいて、心理社会学や社会学の観点から、これらの問題を扱ってきた様々な著者を紹介しています。しかし、アイデンティティは、大人になってから定着するものではなく、自発的であれ強制的であれ、危機、変異、移行の対象となります。著者は、経済学の専門家（アマルティア・セン、ジョン・ロールズ）や社会哲学の専門家（ポール・リクール、ジャン・マルク・フェリー、アラン・モンテフィオーレ、デビッド・ラスムセン、アクセル・ホネス）を参考にしています。なぜなら、仕事や職業上のアイデンティティは、そのダイナミクスや危機において、職業倫理や実存倫理の外では理解できないし、個人や集団といった社会的アクターが仕事の内外で自分の人生に意味を与える方法の外では理解できないからです。最後に、著者は、失業やストレス、将来の不確実性によって崩壊した社会の中で、これらのアイデンティティの精緻化と進化の原動力となる主要なパラドックスを明らかにしています。

はじめにコンダクトからプロフェッショナル・アイデンティティへ。

職業上のアイデンティティの重要性と、それが個人のダイナミクスと結びついて理解するためには、**個人や集団の行動**の中にそれらを位置づける必要があります。**行動**とは、人、人の側近、物理的・社会的・文化的環境との相互作用

¹ トゥールーズ・ル・ミライユ大学名誉教授、応用心理学高等研究所教授。リスボン

² サイコセラピスト、コーチ。リスボンのDave Morgan Consulting Companyのエグゼクティブ・ディレクター

を特徴とする人間の実践の場に結びついた、精神的活動と行動の複雑な人間内部の表現を意味します。しかし、この概念を明確にすることは重要です。

ビヘイビアは、しばしば行動と同義と考えられています。しかし、それらを区別することが必要です。ピアール・ジャネットは、ある行動、ある特定の形の人間の行動（期待、勝利や失敗の行動など）を「導管」と呼んだ。行動は観察可能な「客観的」なものであるとされていますが、行動には同じ行動の目に見えない力学、つまり表現される前の精神活動や感情が導入されています。

1929³年、ジャネットは「心理学的事実は、生きているものの行為である」と書いた。行動（外見的に認識できる動作、行動、言葉）は確かに心理的事実の一部ですが、それに加えて、動機付けの力学、意図、意識、熟慮など、重要な内的側面を持っています。行動とは、欲求、動機、守るべき価値、作動させるべき防御によって指示される、組織化された一連の行動および精神的活動であると言えます。このように、確信や信念、空想や白昼夢、内的言語、愛や攻撃の感情、専門的活動における精神的評価などは、すべて表象や行為、身体や社会的コミュニケーションを明確にするための心理的操作です。行動という概念は、人⁴の組織化された、構造化された、統一された性格の仮説を意味します。行動は、物理的または社会的な側面に還元することはできません。「行動というのは、行動で外在化されるものだけでなく、空想の形で内在化されるものや、心理装置の様々な傾向の間の主観的な関係の形で内在化されるものも意味している」（Widlöcher, 1973）。Meyerson(1948)やMaliu(2003)などの著者は、行動の力学における社会的人格的表現の出現と機能において、感情、気持ち、価値観が重要であることを示しています。ピランデロは『作者を探す6人の登場人物』（1921年）の中で、「事実は袋のようなもので、空であれば立たない。事実を成立させ、意味を持たせるためには、まず、その事実を引き起こした動機や感情を含める必要があります。行動には、その人が自分の状況に意味を与え、自分が守る価値観や自分が展開するプロジェクトに沿って自分の行動を正当化するためのあらゆるものが含まれます。

³Pierre Janetからの引用は、Doron and Parot (1990)が*L'évolution psychologique de la personnalité* (1929)からすでに使用しています。Paris, Éditions Chahine, 1929.テキストの再編集版：Paris: La Société Pierre Janet with the assistance of the CNRS, 1984, 327 p.(ダウンロード可)。

⁴

ラガッシュは、「ある状況下にある生物が、その可能性を実現し、その統一性を脅かしたり、動機づけたりする緊張を軽減するための、物質的・象徴的な操作の集合体」と定義しています。操作のセット』という表現は、生物のあらゆる反応や応答を排除するものではなく、さらにこれらの反応や応答が構造化された全体を形成していることを意味している」（1951年、p.310）。



したがって、ここでは、アイデンティティの問題を専門分野の行為に結びつけることが重要である。

職業上の行動」について語ることは、「すること（行動）」と「あること（意識、能力、感情など）」の関係を紹介することを意味します。一般的に「存在する」⁵という事実と関連し、人間の活動のあらゆる分野に関連して喚起される「アイデンティティ」という概念は、他の様々な分野、または活動領域、生活環境、外部または内部空間と関連して、専門的な行動において重要な役割を果たすでしょう。

- 体の分野：「美しい」とか「醜い」とか、「背が高い」とか「背が低い」とか。
- 食品分野：「肥満」であること、「拒食」であること。
- ジェンダーや性的な分野：「男」であること、「女」であること、「ストレート」であること、「ゲイ」であること。

これらの最初の3つの分野は、ボディ・アイデンティティ、ジェンダー・アイデンティティ、セクシャル・アイデンティティを動員しています。カテゴライズを伴う各

⁵「存在」は、「すること」「知ること」「力」「なること」から抽象的に切り離すことしかできないことは、すぐに明らかです。私たちは、知識、ノウハウ、存在の関係についての古典的な（1968年）三部作に精通しています。しかし、この三部作は、知識に偏りすぎているという欠点があります。それは、力、意味と価値の贈り物、そしてなるという、このもう一つの、ポストモダンの三部作で有効に表現することができます。例えば、どんな成果も切り捨ててしまう（できない）、倫理観（やることの意味や価値）から見て受け入れがたいと感じられるようなノウハウ（スキル）とは何なのか。

タイプの活動は、多かれ少なかれ複雑なアイデンティティ・システムの構築と進化を前提としており、その人の多様性や複数の分野とのつながりを含んでいることに留意すべきである。このような定義は、ステレオタイプ化やスティグマ化の形をとることがあります。これは、2つのグループや人々、2つのカテゴリー、2つの特性を対立させる二元的な考え方が確立されている場合によく見られます。これは、様々な社会的分野や人生の領域に応じて、ある種の分類がなされていることからわかります。

- 家族の現場：「融合」する親（放任）か、「去勢」する親（独裁者）か。
- 学問や職業の分野：「才能がある」「頭が悪い」、「技術者」「セールスマン」、「労働者」「オペレーター」（公式には混同される2つのアイデンティティだが、自己表現や他者の表現に違いが生じることがある）。
- レジャーの分野では、漁師、読書家、観戦者、スポーツマンなど、特定の実践に結びついた多くのアイデンティティを紹介しています。
- 文化、宗教、政治などの分野。

また、社会的、文化的、スポーツ的など、さまざまな活動や環境に関連した修飾語を増やすこともできます。これらのアイデンティティは、個人のアイデンティティを構成するために、あるいは職業上のアイデンティティを方向付けるために、階層化されたり、統合されたり、⁶互いに対立したりします。第一近似として、アイデンティティは、さまざまなタイプの活動や機能に関連して、人、グループ、機関を「修飾」するために必然的に介入すると言える。したがって、アイデンティティとは、その人が自分自身を記述し評価することを可能にするだけでなく、他の人が自分を記述し評価することも可能にする表現や感情で構成される、修飾された帰属のプロセスである。この評価記述は、その作者やターゲットによって、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルのいずれかになることに留意する必要があります。失業者、主婦（または男性）、退職者などのアイデンティティは、一般的に職業的なアイデンティティと比較して、多かれ少なかれ切り捨てられます。しかし、後者はそれ自体、対応する職業の評価尺度や、関係するアクターの社会的・文化的背景に応じて、多かれ少なかれ階層化されています。しかし、このように定義されたアイデンティティは、それが導く広範な行動の力学の一部であると同時に、Maliu (2003) が言うように、決断と「個人的な行為」を通じて意味と存在理由を見出すことに留意すべきである。

マーシャ（1991）が提唱したように、パーソナル・アイデンティティには3つのファセットがあります。

6

例えば、バスケットボール選手になるには背が高い方がいい、騎手になるには背が低くて軽い方がいい、.....など、男性的な職業や女性的な職業についての職業的な固定観念は言うまでもありません。

- **主観的な側面**：表現、イメージ、感情と、外部（物理的、社会的、文化的）の機会や圧力との関係において、特に自己の一体感や連続性についての実際の、あるいは想定される感情など、複数の感情を伴う。
- **行動面**：あらゆる種類の習慣、態度や動機、観察可能で予測可能な反応などで構成されます。
- **構造的側面**：現在のさまざまな状況だけでなく、個人の歴史や時間調整に関連して、個人の機能全体を制御、組織化、維持、変更する対象者の能力を含む。

個人のアイデンティティは、それを説明し、構成する複数の社会的、職業的、文化的なアイデンティティを常に考慮しなければなりません。さらに、これらの複数のアイデンティティは、たとえパーソナル・アイデンティティによって調整されたとしても、パーソナリティの一部を構成するにすぎません。彼らは、人のさまざまな行動に関連して、表現のシステム、信念、プロジェクト、行動⁷のシステムの間のアーティキュレーションに介入します。もちろん、個人のアイデンティティと集団のアイデンティティの間には、密接で複雑なつながりがあります。例えば、個人のアイデンティティは、集合的に構築された人格⁸の暗黙の理論と関連しています。逆に、集団的なアイデンティティは、複数の学習経験を通して個人に内在化され、充当されます。しかし、経験や人生経験によって、人は危機や移行、アイデンティティの変化を経験します。これは、理想的な表現（架空のものや実際にはない基準値に基づくもの）や実用的な表現（具体的な経験を通して生きているもの）、望ましい行動や規定され⁹た行動と関連した職業上のアイデンティティの場合です。アイデンティティのダイナミズムは、対人関係（個人が一人で考えることや活動）、対人関係（他の人との話し合いや活動）、組織関係（目的の検討、職業組織が期待する能力、表示されているまたは暗示されている義務や権利、禁止事項、要求事項、助言）のプロセスで構成されています。

1. アイデンティティ：定義と特徴

⁷この点については、Curieらが提唱した活動システムの理論が参考になる。(CURIE, 2000)

⁸BrunerとTagiuri（1954年）から借りてきたIPP（Implicit Theories of Personality）という概念は、ヨーロッパではLEYENS（1983年）やBEAUVOIS（1984年）によって呼び起こされ、現在では精神社会学の共通言語となっています。TIPsとは、常識的に考えて、他人（または自分）についての心的表現であり、それには、「すること」（誰かがこれをすれば、その人もこれをする）または「あること」（誰かがこれをすれば、その人もこれをする）についての性格的特徴があらかじめ組織化されている。BELLIER(2004)は、企業の個人的・集団的機能におけるTIPsの重要性を、ノウハウとの関係、関係する人々やグループの自己管理やアイデンティティとの関係の両方で示しています。

⁹

処方箋には、明示的なもの（法律や規則を参照する）と、暗黙的なもの（表現、ポジティブまたはネガティブなステレオタイプなど）があります。

アイデンティティの予備的な定義を進めるためには、「アイデンティティ」と「自己概念」を区別する必要があると考えています。Rによる。L'Ecuyer¹⁰は、「パーソナル・アイデンティティ」と「自己概念」という概念は、同じプロセスと内容と呼び起こし、測定します。他の著者にとっては、逆に差別化されるべきものなのです。例えば、Honest and Yardley

(1987)は、「アイデンティティ」概念が個人の行動を説明するために構造的または社会的プロセスを優先するのに対し、「自己概念」モデルは個人を行動の主体と考えると考察している。しかし、構造的・社会的決定と個人的決定の両方を考慮に入れる必要があります。

私たちの考えでは、「自己概念」とは異なり、「アイデンティティ」とその反対概念である「他者性」の概念は、比較のプロセスを伴うものです。論理学から派生した言葉である「同一性」は、2つの対象の間、または同じ対象の2つの瞬間の間の「同一性」（絶対的な類似性）を意味します。私の同一性は、私が「時間が経っても同じであり続ける」ことを可能にするものです（自分自身との比較）。一卵性双生児同士の同一性とは、全く同じであることを意味します（他者との比較）。しかし、この最初の定義（idemによる定義）は、アイデンティティを対象物の特定の特徴の肯定として定義するもの（ipsityによる¹¹定義）とは対照的である。それはもはや、同じであることの問題ではなく、自分自身であることの問題である。

アイデンティティとは、表現、感情、知識、プロジェクトのシステムであり、このシステムによって人は自分自身を認識し、他者からも認識されます。それによって個人は、「対象物、状況、他者との対峙において、他者とは異なる価値ある単位として、自分の生活環境に関与する個人として、進化しながらも時間の経過とともに自分自身を同一のものとして認識することができる」自分を構成することができます（MASSONNAT, PERRON, 1990,

p.10）。個人のアイデンティティとは、「自己の認識、知識、評価、統合に関連するものであり、信念や価値観などの文化的なシステム、行動様式やライフスタイルと常に関係しており、したがって、これらのシステムやスタイルに結びついた複数の集合的なアイデンティティやさまざまなグループのメンバーシップと関係している」（TAP, 2005a, p.278）。

Henri

LEHALLE (1995) によると、アイデンティティの確立には、記述的（自己記述）、評価的（自尊心）、統合的（内部結合）という3つの異なるプロセスがあります。同

¹⁰ルネ・ルクイエは、「自分は何者か」という問いから始まる、人生における自己概念の進化を最もよく研究しているフランスの作家です。あなたは誰ですか？L'ECUYER, 1978; 1980; 1981; 1994を参照してください。

¹¹ポール・リクールは、著書『Soi-même comme un autre』（1990年）の中で、アイデンティティのこの2つの側面（idem/ipse）とその複雑な相互作用を比較しています。社会心理学での使用については、TAP（Identité et exclusion, 2004）を参照。

じ著者によれば、アイデンティティには、一貫性と連続性を維持すると同時に、新しい形態を構築する能力（形態形成）を実現するという、二重の統合的機能があるという。Hanna Malewska-PeyreとPierre

Tap (1991) は、アイデンティティの生成は、社会的統合（対人的、社会文化的）と心理的統合（¹²対人的）という2つの統合プロセスにも関連していると考えています。この2つの統合プロセスの連携により、子どもは社会性を身につけ、自分自身を¹³確立することができるのです。ポール・リクールは、人が自分の物語を語ることによって、個人的または職業的なアイデンティティを構築し、強化することができる、ナラティブ・アイデンティティの重要性を示しました。そのため、ライフストーリーの重要性、自分自身を語る可能性、幸せでも不幸でも自分の物語の主人公になることの重要性を理解することができます。ポール・リクールによれば、ナラティブ・アイデンティティ（memetism（同一であること）とipsity（自分自身であること）を連結したものは、「経験の物語化」を可能にします。物語は、個人のアイデンティティに歴史的な定着と厚みを与え、倫理観を良い人生の実質的な理想に向けさせる」。

しかし、Philippe MALRIEU

(2003)が正しく指摘しているように、「自伝的記述は、対象者が自分の人生の経過を語る単純な「人生の物語」ではない。それは、反射的な質問をすることであり、その中で、自分は何ができたろうかと問いかけ、自分の経験や、自分が置かれている強さや弱さの状況を評価した上で、何ができるだろうかと考えるのである。多少なりとも首尾一貫した将来の計画が策定されている」（前掲書、159ページ）。

しかし、経験した葛藤は、行為者を「主張の合理的な正当化」へと導き、それによって論証的・再構築的なアイデンティティを構築します。「議論は、法の主体の責任に関与し、倫理を正義の社会の手続き的な考えに向けて屈折させる」。この概念は、「実質的な理想」から離れて、危機、突然変異、そして可能な再構築を喚起することを義務づけています。¹⁴

Jean-Paul

CODOL (1980) は、アイデンティティを、1.ユニークな対象としての自己（独自性、差異感）、2.自己の首尾一貫性、安定性、相対的不変性（自分自身との一体感、同一性）、3.自尊心（力の感覚、自律性、自尊心）の3つの次元で定義しています。彼によれば、アイデンティティとは、「個人が自分自身について受け取った、あるい

¹²精神的統合

という概念は、ブルーノ・ベトハイム（1943年、1979年に再版）がナチスの強制収容所（彼自身も2年近く収容されていた）での生存について喚起したものである。彼によれば、この精神的な統合こそが、収容所での非道な生活環境に最もよく耐えた囚人の特徴であった。この統合は、個人に根付いた意味のある価値観である、内的な信念や確信の強さと結びついていました。

¹³ Pierre TAP, 1991 も参照してください。

¹⁴ Ferry, J.M. *L'Ethique reconstructive*（再建医療）。パリ、セルフ、1996年、p.7

は構築した意味のある情報の構造的な集合体」であるという。それは究極的には、個人が自分自身に帰属させる特徴、資質、特性 (...) の組織である。"(Op.cit.p.156)である。これらの特性は、その人の社会的所属に応じて、外部情報を認知的に統合した結果である。

Paul Mussen

(1980)は、アイデンティティを「認知と感情の両方の特徴を持つ複合的な精神構造であり、それには、自分自身を他者とは別個の、自己一貫性のある存在であり、その行動、ニーズ、動機、関心には合理的な程度の一貫性があるという個人の認識が含まれる」と提示しています (Op.c., p.13)。

Erik

ERIKSON (1968) は、「パーソナル・アイデンティティ」と「エゴ・アイデンティティ」を区別しています。個人のアイデンティティには、自己の同一性の認識、実存的な連続性の原動力、そして他者がこの同一性と連続性を認識しているという認識が含まれます。自我のアイデンティティは、むしろこの存在の自我の質に関係しています。しかし、この2つのアイデンティティの間のアーティキュレーションが、その人の個性のスタイルを決定します。その人は、自分自身の特性を通して、他の人々との間に本物の意味のある関係を築くようになるでしょう。「アイデンティティの探求には、人生、他者との関係、歴史、個人的または集団的な願望を理解することが含まれる」 (TAP, 2005a, p.305)。

II.資格制度としてのアイデンティティ

「個人のアイデンティティは、所属するグループ、参照するカテゴリーや活動、社会的地位に関連する集団的なアイデンティティを明確にすることの一部である」 (TAP,

1996)。このように、パーソナル・アイデンティティは、複数の次元が統合された構造化システムであると考えられます。

パーソナル¹⁵・アイデンティティの構造化には、7つの次元が関わっています。

¹⁵

TAPの1980年、1988年、1991年、1996年を参照。アイデンティティの定義の進化、アイデンティティの次元と特性（特徴、システム、戦略など）の性質と場所に見られる変化は、その進歩を示すものです。ほとんどの著者は、アイデンティティの「実質主義」的な概念（永続性、同一性、単一性、連続性など）を捨て、動的な概念を支持している。だからこそ、アイデンティティの概念や逆説的なダイナミクスが重要だと思われるのです。ピアジェが言ったように、構造のないプロセスはなく、プロセスのない構造也没有。言い換えれば、構造そのものがどのように変化するかを分析せずに、構造の定義を変化に基づく概念に置き換えることはできません。アイデンティティを失った」「自分が何者なのか分からない」と言う人がいるかもしれ

1. 自己認識の時間的な次元。アイデンティティの感覚とは、自己認識の時間的な次元を指します。連続性」または「準永久性」の感覚から、対象者は時間と空間の中に自分を位置づけ、それによってプロジェクトを構築し、組織化することができるのです。プロフェッショナル・アイデンティティの確立と安定化には、時間がいかに重要であるかを私たちは知っています。どんなポジションでも、候補者は長年の経験を通して自分のスキルを証明しなければなりません。しかし、アイデンティティの意識は、今では新しい状況に適応する必要性に迫られています。柔軟性、変化への対応力、創造性、つまり、自分の習慣的なあり方や行動に疑問を持つことができなければなりません。
2. 統一感やまとまり感があること。アイデンティティを感じることは、自己の一体感やまとまりを感じることにつながります。これらの感情は、個人が自分自身について持っている、多かれ少なかれ安定した、多かれ少なかれ構造化された表現のアイデアを指しています。この統一と統合の視点は、コントロールされた時間と、個人の歴史という歴史的な視点の中で構築されます。職業上のキャリアの変化（失業、機能や活動分野の変更）に直面したとき、その人はこれらの変化を個人的な不安定さのしるし、アイデンティティの喪失の証拠として経験することがあります。特に、有効性の感覚が疑問視され、内面的な一貫性の喪失、自己破壊の感覚、自己の基盤として認識されている価値観の裏切りがある場合はなおさらです。
3. 個人のアイデンティティを構成する複数のアイデンティティのシステムは、まさにこの多様性の組織化から豊かさを引き出しています。多様性とは、一人の人間を構成する複数の役割を連想させるだけでなく、一人の人間に¹⁶組み込まれた複数のキャラクターをも意味します。このような役割の割り当て、所属的なコミットメント、集合的なプロジェクトへの参加は、内的な自己（その価値と能力）の認識と外的な自己（複数）の認識を豊かにします（「私の価値は何か？他人と比較して自分をどう評価するか）。しかし、この多様性のリスクは、「存在」を「持っているもの」（累積的で数値化可能な「特性」）に還元してしまうことです。文化的な用語と同様に、専門的な

ませんが、そう言うことで、失ったものに一貫性や意味を見出し、それに折り合いをつけようとする、あるいは再構築しようとする努力を示しているのです。

¹⁶ キャラクター」の段階という概念は、Pierre

Janet（1929年）によって呼び起こされた。"人間の人格は、個人の自己になる前に、性格の段階を通過します。他人との関係において、あるいは自分自身との関係において、私たちは特別な力を持ち、特定の役割を果たすことができるキャラクター（＝個人）です。私たちの中には、外に在るときに性格と、家に在るときに性格の2つの性格があります」（Op.cit.pp.178 et seq.

用語でも、多様性は、他者の違いを受け入れる必要性として現れます（人としての他者だけでなく、*他者*として認識される他の活動、職業、商売など）。しかし、多くの場合、同じ社会的アクターに対して、複数の機能や活動を同時に管理する必要がある、それらは矛盾していたり、相反していたりすることがあります。最も重要な例は、職業上のアイデンティティと家族¹⁷のアイデンティティとの間の必要な連携に関するものです。これらのアーティキュレーションには、当然ながら2つの環境間の行動や時間的な位相の調整が含まれます。

4. *自律を求めることによる自己主張、分離と承認の必要性*。自律性の追求は、肯定と承認の必要性によって達成されます。個人は、認知的分化と感情的対立を通して、自律性、自己肯定感を求めます。それは、自分が他とは違う、ユニークな存在であり、独立した存在であることを示す方法です。もちろん、自己主張、自律性、承認のニーズは、プロフェッショナル・アイデンティティの確保と管理に重要な役割を果たしています。しかし、それらは集団作業の機能的なニーズ（効率性、共有や競争、グループや会社の目的との同一化）と相反する可能性があります。
5. *オリジナリティを感じることによる特異性*。個人は自分の違いを強調し、オリジナリティ（限界を超えた逸脱性にまで及ぶこともある）を求め、それを通して、自分の特異性への探求を明示する。特異性や独創性は、創造性の重要な原動力となります。しかし、プロフェッショナル・アイデンティティの集合的な定義は、ほとんどの場合、「自分が...のときに何であるべきか、何をすべきか」という規範的な方法で定式化されています。また、新しいものを生み出すために必要な、モチベーションや自由な空間の重要性もほとんど考慮されていません。しかし、特異性、つまりオリジナリティのあるものが、必ずしもクリエイティブであるとは限りません。疎外感や職業上の排除につながることもあります。
6. *アイデンティティは、行動と作品の制作に根ざしています*。アイデンティティは、行動、コミットメント、責任を取ること、そして社会的な共同作業を通して確認され、強化されます。本人は責任感を持ち、他人から責任感があると認められることを求めています。このように、アイデンティティ、行動

¹⁷

ファミリー・アイデンティティやプロフェッショナル・アイデンティティが単数形で語られることがあまりにも多い。しかし、家庭生活と同様に仕事の現場でも、アイデンティティは複数存在します。そのため、職業内の規制と家族内の規制（自分自身と他人との間の規制）があり、それに加えて、職業上のアイデンティティ（および活動）と家族のアイデンティティ（活動）との間の規制があります。

、そしてプロとしての責任の関係は明らかに重要です。Carmel CAMILLERI (1990) が示したように、*オントロジカル・アイデンティティ* (状況の外での自分の一般的な定義) と *プラグマティック・アイデンティティ* (特定の状況での行動における自分の本当の姿) を区別する必要があります。

7. *アイデンティティ*は、*価値*として、また*価値*を通して確立されます。困難な状況にあっても、その人は他の人から愛され、認められ、賞賛され、受け入れられることを必要としています。自分を大切にし、他人から見た自分の価値、ひいては自分自身の価値を見出そうとします。この側面は、リーダーとして引き受けたプロジェクトを成功させたいというニーズにつながっています。*成功の感覚*は、自己価値の感覚と密接に関連しており、価値と「未来」があると認められる必要があります。しかし、このような成功の実感、基準や能力の定義と向き合うことになる。そのため、社会学者、特にSerge PAUGAM (2002) によって開発された*資格* (または*失格*) のプロセスと結びついています。

III.です。カテゴリー化のシステムとしてのアイデンティティ

個人のアイデンティティの形成に関する理論では、個人の集団的な挿入、特に所属する集団との同一性が重要視されています (LORENZI-CIOLDI, 1988)。¹⁸アイデンティティの付与とは、人をあるカテゴリーに配置することで構成される認知的・言語的帰属の集合的プロセスです。カテゴライズは、アイデンティティ構築の個人内、対人、統合的プロセスに共通するメカニズムです。多かれ少なかれステレオタイプ化され、多かれ少なかれスティグマ化され、エリクソンが「断片的なアイデンティフィケーションの首尾一貫した組み合わせ」 (ERIKSON, 1968, p.53) と呼ぶような*類型化スキーム* (BERGER, LUCKMAN, 1966) を用いることで、個人は自らのアイデンティティを構築するのである。「他者を識別し、自分を識別するために用いられるこれらの特定のカテゴリーは、相互作用が行われる社会的空間に応じて、また軌跡が描かれる伝記的・歴史的時間性に応じて変化する (DUBAR, 2002, p.114)。

18

人は、あたかも「持っている」かのように、アイデンティティを与えることも受け取ることも、取ることも頼むことも、征服することも失うこともできることに注意してください。私は体を持っていますが、『私はこの体である』、私は病気を持っていますが (私は癌である)、私が私の病気である (私は癌である) ことの方が難しいのです。このアイデンティティは、強さや弱さ、脆弱さや回復力、個人的なものや集団的なものがあります。アイデンティティには、形容詞のような修飾的なものと、普通名詞や固有名詞のような分類的なものがあります。

これらの分類がアイデンティティ構築プロセスに影響を与えることは事実ですが、機械的に決定したり、決定的に固定したりするわけではありません（LAING, 1961; DESROSIERES THEVENOT, 1988; DUBAR, 2002）。発達的には、「カテゴライズされた識別は、社会的アイデンティティの確立と同時代のものである」ということが言えます。これは、子どもがカテゴリーやグループ（所属や参照先）を特定し、そのカテゴリーやグループの価値観や基準、ルールを守る傾向があるというプロセスに基づいています。これらのアイデンティティは、「類似化」（類似点を強調すること）と「差別化」（ジェンダー、民族、文化、世代、国、職業、仲間、スポーツなどのアイデンティティ）の複雑なネットワークの中で確立されます（TAP, 2005a, p.313）。クロード・デュバーによれば、社会的アイデンティティの認識空間は、制度的要求に基づいて構築されたアイデンティティのハードコアである、知識、スキル、自己イメージの認識の有無に非常に密接に依存している。識別や認識を求める個人と、地位やカテゴリー、装置や様々な形の認識を提供する機関との間の取引は、対立することがあります。

IV.統合的なシステム・ダイナミックにおけるアイデンティティ（人物像／社会化戦略とスタイル）。

アイデンティティの形成には、社会的統合（対人的、社会文化的）と心理的統合（対人的）という2つの補完的なプロセスが必要であるとする著者もいる（MALEW SKA-PEYRE, TAP, 1991; TAP, 2005a）。この2つの統合プロセスがうまく機能することで、人は子供の頃から社会性と個性を身につけることができます。ペルソナシオン（トゥールーズのチーム¹⁹が以前から提唱しているパーソナライゼーションよりも好ましい用語）は、被験者が自分の旅程を社会化し、発展させ、構築するために用意したすべての戦略を統合したものです。それは、対象者が自分自身を人として構築するための行動を支える一連の心理的プロセスを明確にするものです。以下に紹介するペルソナ化プロセスでは、4つのタイプの戦略を明確にしています。

1.アイデンティティ戦略とは、守るべき過去や、個人的な歴史や経験（空間と時間に位置すること、自分自身であり続けること、価値を持つこと）に固定されることを意味します。エドモンド・マーク・リピャンスキーは、アイデンティティ戦略の運

¹⁹ Tap, Roudès and Antunes (for forthcoming,

2010)では、今やマーケティング用語となった「パーソナライゼーション」の意味の変遷について論じています。複数のデバイスがパーソナライズされる：「Vistaのデスクトップをパーソナライズする」とは、消費者がコンピュータのデスクトップの構成（色、フォント、サウンド、画像など）を自由に選択できることを意味します。彼は「プレゼンテーションをカスタマイズ」することができますもちろん、困難な状況にある人への支援をパーソナライズすることは、「機器ではなく、その人を中心に展開する」という意味を持ちます。そのため、適切な動詞の問題が発生しても、パーソナライゼーションのプロセスについて話すのが望ましい。

用上の定義を「1つ以上の目標（明示的または無意識のレベルで定義されたもの）を達成するために行為者（個人または集団）が（意識的または無意識的に）実施する手順であり、相互作用の状況の機能として、すなわちこの状況のさまざまな決定（社会史的、文化的、心理的）の機能として開発された手順」としています（LIPIAN SKY, TABOADA-LEONETTI, VASQUEZ, ,1990 p.24).

2.社会的ポジショニングとコミットメントの戦略は、個人と社会集団の関係（居場所があること、愛されていること、認められていること）を意味します。集団行動への参加を望み、社会的な承認を求め、社会の中で果たすべき役割を模索することで、他者の目に映る自分の居場所や価値を与え、自分の所属する集団の中で他者との関係において自分を位置づけることができるようになります。帰属の概念は、ロバート・カステル（1991）が特別な方法で開発した所属（または離反）の概念と関連付けることができます。

3.プロジェクト戦略とは、管理・構築されるべき未来のことです。達成すべき目標は、実行すべき手段によって具体的に形作られる。個人は、現在の困難な状況から自分を解放するために、自己プロジェクトを再始動させます。

4.対処戦略（適応／コーピング）は、個人が巻き込まれている現在を管理し、解きほぐすために用いられます（感情的に集中する、問題を中心に考える、社会的支援を求める）。コーピングとは、現在の困難な状況に適応するためのものです。これらの適応-

防衛モードは、評価プロセスとともに、人と環境の相互作用におけるストレスの程度を決定するための重要なプロセスの一つを構成しています(SORDESら、1994年、TAPら、1995年、SORDES-ADERら、1995年、ESPARBES-PISTREら、1996年)。

V.アイデンティティ・スタイル

アイデンティティのスタイルや戦略は、文献でもよく取り上げられています（CAMILLERI et alii, 1990; LIPIANSKY, 1992, 1998; TAP, 1979, 1988, 1991; TAP, VINAY, 2000）。E.エリクソンはすでにこの概念を提唱しています。彼は、アイデンティティ戦略を「人の個性化のスタイル」になぞらえました（1968/1972）。しかし、スタイルと戦略を区別することは重要です。TAP(2005b)によると、「スタイル」という概念は、行動の調整された個性化と多様化のプロセスに関連しています。彼はスタイルの複数のカテゴリーを説明しています。

- 認知的スタイルは、しばしば感情的スタイルと対立する（KOGAN, 1976; WITKIN, GOODENOUGH, 1981; HUTEAU, 1981, 1985, 1987）。

- **対処スタイル**(COHEN, LAZARUS, 1973)とは、困難な状況に置かれたストレスを感じている人の行動の予測可能性を特徴づけるものです。最近よく使われるようになった「**対処戦略**」という概念(TAPら、1995、1998; ESPARBES, SORDES-ADER, TAP, 1996; SORDESら、1994)は、スタイル的な概念の貢献を超えて、人、文脈、状況、出来事との関係における個人内プロセス(戦略の認知的組織化、意思決定における動機や感情のメカニズムの重み)のダイナミクスを考慮した新しい**戦略モデル**を導入することを可能にしている。
- **ライフスタイル**(ERIKSON, 1968; VANDENPLAS-HOLPER, 1998)とは、人生を構成し方向付ける特定の方法に関連する選択肢を示す。
- **モチベーションスタイル**という概念は、Apter (2001)が**反転理論**の一環として導入したものです。この理論は、連続性、平衡性、恒常性の調節という伝統的な理論に反対し、矛盾する2つのプロセスが矛盾しつつも相補的に介入する、対話的なダイナミズムを提案しています ...
- Mihaly Csikszentmihalyi (1988, 1991)が提唱した**フロー理論**は、モチベーションスタイルの理論に近いものがあります。それは、創造の特権的な瞬間、つまり**最適な自己集中**の経験として**経験**される、**オートテリック・フォーカス**(自己組織化)のプロセスの存在と重要性を強調するものです。この理論は、内的または内発的な動機が積極的に存在するという仮説に基づいています(VANDENPLAS-HOLPER, 1998)。しかし、同時に外部からの圧力やインセンティブがあり、それによって外部の次元が強調されたり、妨げられたり、方向付けられたりします。

VI.アイデンティティ：システムからプロセスへ

先ほど見てきたように、パーソナル・アイデンティティはパーソナリティとは区別しなければなりません。アイデンティティは、どのように定義されていても、その人の全体像ではありません。それは、当該個人のパーソナリティのサブシステムであり、その人の認知的および感情的な次元とのダイナミックな関係において構成されるサブシステムである。一方、パーソナリティは、すべての生物学的・心理学的・社会的システムが複雑に連携して構成されており、そこから人は行動し、反応し、反映します。表象のシステムとしてのアイデンティティは、関係する理論に応じてさまざまな方法で構成されます。この観点から、2つのレベルの分析が考慮され、しばしば対立しますが、密接な相互作用があります。

● アイデンティティの内部特性：

個人内 (I-Self) と個人間 (I-Other) の関係に対する現象学的アプローチ (ROGERS, 1951; ANTUNES,

2000) は、アイデンティティと自己表象の内部構築のプロセスを重視し、社会的・文化的な文脈と、この文脈に含まれる物質的・象徴的な条件との絶え間ない統合的な関係の中で、特に個人的な経験の役割を中心とした精緻化のプロセスの重要性を紹介しています。DUBAR (2002)

は、伝記的プロセスをアイデンティティ構築の個人内プロセスとして提示し、P. Mussen (1980)

は、自分自身による自分自身の首尾一貫した表現の構築の重要性を強調しています。

● アイデンティティの相互関係の特徴

Erik

Erikson (1950) は、個人的および社会的アイデンティティの構築において、相互関係の次元の分析を開発した最初の研究者です。Monique PINOL-

DOURIEZ (1984) やSerge

LEBOVICI (1985) によると、アイデンティティの構築は、認知的・感情的な変容のプロセスでもあり、赤ちゃんと子どもの初期の相互作用の中で育まれるものです。Dubar (2002) は、個人的アイデンティティと集団的アイデンティティの区別を否定し、社会的アイデンティティという概念を提案しています。この概念は、個人の自分自身との相互作用から構築される内部的なものと、個人が相互作用する機関との相互作用から構築される外部的なものという、2つの移行の間のアーティキュレーションを意味しています。デュバーの提案は、著者が個人的／集団的な側面と心理的／社会²⁰的な内容を混同する傾向があるという点で、議論の余地があります。実際、個人的なものであれ集団的なものであれ、どのようなアイデンティティも、社会文化的な側面（価値、機能、意味の効果など）と、充満の心理的なプロセス（行動の翻訳、想像など）を含んでいます。この多次元性は、アイデンティティのすべてのカテゴリー（個人、職業、ジェンダー、宗教、国や大陸など）に適用できます。

一方で、「同一性とは、必ずしも『同一』であり続けるものではなく、偶発的な『同一』の結果である」とするデュバーの仮説には賛同する。これは、「分化と一般化」という二重の言語的操作の結果である。第一の操作は、何かまたは誰かを他の誰かまたは何かとの関係で特異なものにしている違いを定義することを目的としている。この2つの操作が、「固有のものが共有されている」というアイデンティティのパラドックスの原点です。このパラドックスは、両方の操作に共通する要素である「他者との同一性」を考慮に入れなければ解決しない。この視点では、他者性の

20

この区別は、個人の機能に統合された社会的データの存在（あるいは社会的データの個人的な充当）や、逆に集団の機能に統合された心理的データの存在（あるいは心理的データの集団的な充当）を仮定することにつながります。

ないアイデンティティは存在しません。アイデンティティは、他者性と同様に、歴史的に変化し、その定義の文脈に依存する」(DUBAR, 2000, p.3)。

Carmel CAMILLERI et alii

(1990b)は、アイデンティティ構造のコアの構成要素について言及している。アイデンティティとは、社会的行為者としての社会的行為者（個人または集団）の、ある瞬間の关系的状況に関連した心理的および社会的側面を構成要素とする、多形態的で動的な構造であると定義しています。したがって、環境との相互作用や、差別化と同化の二重の動きの中で、アイデンティティが構築されるのです。このプロセスでは、他者との同一性と、他者との関係においてなされる区別の両方を強調する必要があります。²¹

VIIです。アイデンティティのパラドックス

アイデンティティは矛盾した性質を持っています。つまり、矛盾していながらも相補的で切り離せない方向性を含んでいるのです。社会心理学では、ジレンマ（「囚人のジレンマ」；コールバーグの道徳的ジレンマ、1987年...など）や逆説的な禁止命令（「禁じることは禁じられている」）、あるいは二重拘束やプラグマティックなパラドックス（パロアルト；ワッツラウィック、ベイトソン、...など）の例が多く取り上げられています。

アイデンティティ・²²ダイナミックの一環として、6つのパラドックスが挙げられます。

- アイデンティティの第一のパラドックスは、共通のアイデンティティを持つ対象物（人）の間に、類似点と相違点が相補的に存在し、相反することに関するものです。アイデンティティは「同一性と異質性、類似性と相違性の対立の中で構築される」（TAP, 1980b）。社会的認知プロセス（分類、意味づけ、正当化）は、認知的発達

²¹

表現や感情のシステムとしての個人のアイデンティティには「核」があり、それが疑問視されたり、他者に否定されたりすると、アイデンティティの危機や個人の尊厳を守るための暴力反応を引き起こすのではないかと、という議論が常に行われています。実際、アイデンティティを、多かれ少なかれ深さのある複数の皮で構成されたタマネギ（比喩的！）として表現することができます。タマネギに芯がなくても、自分自身を伝達して繁殖させるための「胚芽」はあります。それを切ると、涙が出てきますねCamilleri (1990a,

p.86)が提唱した、アイデンティティの核心は（事実のアイデンティティではなく）価値のアイデンティティであるという仮説は、まだ議論の余地があります。

²²タップは「アイデンティティと排除」という論文

で、4つのパラドックスを提唱しました。その後、さまざまな聴衆や研究者との議論を経て、ここにさらに2つのパラドックスを加えることになった（TAP,2005 c, no.83, pp.53-78参照）。

と社会化の両方を促進し、対象物の差別化を自己と他者²³の差別化-同化と結びつけることも可能にする。これらのプロセスは、個人が比較的安定した物理的・社会的環境の中で生活していれば可能です。

- **第二のパラドックスは、自己中心性（自分自身に対する）と他者への脱中心性との間にある問題点から生じています。**これは、自分のアイデンティティを確立するためには、他者との相互関係を構築するために、（ピアジェの表現によれば）自己中心主義から脱却し、分散化することを学ばなければならないという事実と関連しています。

子どもはこの自我中心主義を捨て、他者との相互関係を築くことで初めて自分のアイデンティティを獲得することに成功します。これはまた、「個人間の関係のシステムや文化的価値の進化」の始まりでもあります（TAP, 2005a: 279）。例えば、プロフェッショナル・アイデンティティの構築には、Me（個人のアイデンティティ）、Us（同じプロフェッショナル・アイデンティティを持つ者）、Them（自分とは異なるすべての者）の間の相互作用の様式を再構築する必要があります。この再構築は、プロフェッショナルな私たちへの帰属を強調し、この私たちを閉じてしまうことにつながります。そして、私と私たちの間の対立を減らし、私たちと彼らの間の違いを強調するように仕向けます。オープンにしようとする場合、より広い「私たち」を選択する傾向があり、これまで差別化されていたアイデンティティをカバーし、自分とは異なるプロフェッショナルを含める可能性があります。政治的な例：フランス人とドイツ人の間の（対立の可能性のある）差別化は、ヨーロッパのアイデンティティに同調することで軽減される。専門家の例：役員と非役員、販売員と技術者の間の差別化（対立の可能性あり）は、企業のアイデンティティとの同一化によって最小化される。

- **第3のアイデンティティ・パラドックスは、不変性のプロセスと変化の管理の間の矛盾した様式に関するものです。**個人的なアイデンティティ（I am I）や集団的なアイデンティティ（we are we）も、時間を超越した永続性のあるアイデアを意味しており、人生の時間の中での変化には関係ありません。しかし、主語（私や私たち）が変化しても、時間的には変わらない、自分自身であるという感覚（時間的・構造的同一性の感覚）を保持しているのです。これが第三のパラドックスである。恒久性と変化の間、理想化と自己イメージの実用的な再評価の間、状況と対話者に応じて、この逆説的なアイデンティティの構築を意味するために、IDentizationという言葉が提案されています（TAP, 1979）。

23

J.P.コドル（1979年、1980年、1984年）、H.ワロン（1963年、1976年）、R.ザゾ（1980年）、P.マリユ（1967年、1980年、1996年）。

専門的に言えば、アイデンティティが最も強く影響を受けるのは、その人が変化を強いられたときです。

- 習得したスキルに見合った職を探し、会社や実際の仕事に適応することで職業的なアイデンティティを確立し、学んだことを単に応用するだけでなく、労働条件や職場の人間関係に適応し、仕事や機能の相互作用の連鎖の中で、自分自身や自分の職業の位置や価値を認識しなければならないのです。
 - その人は機能や仕事を変えなければならない：昇進や降格、アップグレードやダウングレード、課題の受け入れやスキルの再構築、新しいトレーニングを求めることにリンクしている。
 - 失業し、次の仕事を探している人：身につけたスキルに疑問を感じ、以前の職業上の方向性に疑問を持っている人、仕事をしないことに伴う自尊心の低下に対処することが困難な人、新たな獲得物を含む可能性のある新しい現実的な職業上のプロジェクトを組織する努力をしている人。
 - その人は退職して、この変化をポジティブにもネガティブにも経験する。この退職は、それまでの職業生活を断ち切る形で行われることもあれば、比較的継続して行われることもあり、報酬の維持と評価の低下の放棄によって再編成が行われることもあります。
- **第4のパラドックスは、Carmel Camilleri (1990) が提唱した、存在論的な²⁴アイデンティティと実用論的なアイデンティティの対立に関するものです。**自分が思っていること（存在論的観念）と、日々の実践の中で実際にどうであるか（決断や行動をする際の自分に対する意識や感情の実利的な変化）の間には、常に距離がある。ここには、カール・ロジャース（1951年）が提示した自己概念の動的理論における、現実の自己と理想の自己の間の相互作用の重要性と複雑さが、少なくとも部分的には見られる。
- 個人的なアイデンティティと職業的なアイデンティティの間には、（人生における、あるいは仕事における）成功の理想化された概念が介在しており、それは自分が特定できる具体的な人物によって伝えられるが、対象者はその人物から「目標状態」（Kelman, 1958による）、プロジェクト、行動や人生のスタイル、思考や行動の方法を借りている。（ケルマンの表現によれば、1958年）、プロジェクト、行動や

24

この対立は、TAP（2005b）によって、存在論的理想化と実利的同一化のプロセスという観点から取り上げられています。

人生のスタイル、考え方や行動の仕方。ここでは、3つのプロセスが相互に作用することになる。

1. **第三者との同一性**：「自分を進歩させてくれる人との同一性が必要」。
2. **能動的同一化**：「自分が共感できる、あるいは自分のものにできる、外的な行動モデルが必要だ」（自分にはスキルがあるか？もし持っていないければ、獲得できるのでしょうか？）
3. **理想化識別**：「自分を総合的な人間として構成するためには、理想が必要である（グローバルな自己実現、人生のプロジェクトとの関連、整合性、人生に意味を与えることとの関連）」。

これらの3つのプロセスは、認知的、社会的に、一方では実践や行動、他方では価値システム、予測のシステム、意味や正当化のシステムとの間の連携の力学に複雑に介入し、ペルソナ化の力学を構成しています。

- **第5のパラドックスはアイデンティティに関するもので、アイデンティティは連続的に単次的にも多次的にもなる。**文脈、瞬間、あるいは経験段階に応じて、人は精神的な一体感や多様性を強く感じながら生きることができます。この統一性や多様性は、ポジティブにもネガティブにも捉えることができます。統一は、平穏と結びつけられることもあれば、統一が引き起こす損失の苦しみと結びつけられることもあります。多様性は、異質なものを豊かにするものは何かという理解に基づいた、開かれた出会いのポジティブな結果となります。しかし、それは自己の「崩壊」や「液化」、一貫性の喪失、さらには存在しないという感覚につながることもあります。
- **最後に、第6のパラドックスは、アイデンティフィケーション（自己イメージの時間的・構造的変化）とアイデンティフィケーション（人、グループ、価値観などに対するもの）の間の複雑な連携に関するものです。**アイデンティティは複数のアイデンティティーから構築されますが、同時に主体はアイデンティティ・クライシスにおいても、自分が誰であるか、そして相手が誰であるかを知っています。「識別は、したがって、「複数の精神的人物」の経験を可能にするプロセスであり、また、個人と群衆の間の相互のつながりが感情的な共同体から構成されるのは、（彼らを通して）である」（LIPIA NSKY, TABOADA-LEONETTI, VASQUEZ, 1990, p.9）。

VIII.今日のプロフェッショナルな世界におけるアイデンティティのダイナミクス。

Renaud

SAINSAULIEUは、「個人のアイデンティティの差動的構成」の場として、仕事関係の世界の重要性を指摘しています（1977年、p.335）。彼によれば、対立と闘争の場であると同時に、認識と自己確認を伴う自律性と個人的な力へのアクセスにおける出会い、勝利と失敗、リスクと発見の場としての集団の経験は、他とは異なるユニ

一クな人間としての自分を分化させ、表現するために不可欠なものです。言い換えれば、個人的なものと職業的なものの両方の特性が、仕事と非仕事の関係において互いに融合し、明確になるということです。SAINSAULIEUによると、「仕事上の人間関係が、識別力や差別化能力などの根深い人格メカニズムに影響を与えるというだけでは十分ではありません。ソーシャルワーク関係と人の質の間のこれらの関係を説明するプロセスを特定しようとするのがまだ必要である」(Op.cit., p.311)。彼によると、社会的な無力感は、(仕事上だけでなく)アイデンティティの喪失につながり、アイデンティティの再出現は、(仕事上または仕事外の)人間関係や組織上の葛藤に何らかの形で対処できるかどうかにかかっている。

仕事」の行動と「プロ」の活動が混同されていることがよく見受けられます。しかし、子どもや青年は、仕事と仕事以外の活動を区別することを学び、この区別は生涯を通じて持続します(余暇活動、情熱、趣味など)。したがって、プロフェッショナル・アイデンティティと活動は、仕事の行動に結びついた経験と暗黙の理論に基づいて行われると言えるでしょう。個人のアイデンティティは、幼少期に、一次社会化のプロセスを通じて構築されることは事実ですが(BERGER, LUCKMAN, 1966 or tr.fr.

1986)、この構築には、仕事の行動におけるスキルや成功体験の流用が含意されています。その後、学校での仕事、職場での仕事は、学生のアイデンティティ、そして職業人のアイデンティティの構築に決定的な役割を果たすことになります。この構造化には、経験や職業上の旅程に応じて、何度も変更が加えられます。それは、「職業上の軌跡によって形成された進化のプロセス」(BOUQUET, 2006)として特徴づけられるでしょう。

サンスーリュの貢献の重要性を無視することなく、私たちは現在の社会的・職業的現実と、職業的アイデンティティの構築におけるその重要性について、新しい読み方を提案します。現在の経済・社会状況は、依然として深刻な経済危機に支配されており、それが組織運営、雇用管理、労働市場の重要な変革を常に引き起こしていることを想起すべきである(BOUTINET, 1999; ANTOINE, 1996; DUBAR, 2000; ALMEIDA et alii, 2004; ANTUNES, 2006)。

支配的なパラダイムの特徴は、イノベーション、絶え間ない変化、予測不可能性(これには必然的に不確実性が伴う)である。

勢力のある企業の運営体制は、...が中心となっています。1.経済のグローバル化、2.情報フローの拡大、3.

情報通信技術の絶え間ない発展、4.生産手段や雇用管理の柔軟化。

アイデアの観点からは、この時代を「新自由主義の勝利の時代」と呼ぶことができ、組織の現代的なダイナミクスには、1.柔軟性と競争力の要求、2.移転、3.企業合併、4.アウトソーシング、5...が関係している。リストラとダウンサイジング、5.仕事の不安定さ、6.仕事の不安定さ/不安定さ、7.不確実性を管理する必要性。

この新しい経済秩序の中で、各国の経済では失業率が危険なほど上昇している。失業は、大規模な多国籍企業間の合併、工場の閉鎖、労働力の安い国（東欧やアジア諸国）への工場や雇用の移転、ダウンサイジング（エアバス、アルカテル、ファイザー、バイエルAG、アストラゼネカ、ダイムラークライスラー、フォード、フォルクスワーゲン、ヒューレット・パッカーなど²⁵）と関連していることが多い。現在、私たちは近代史上最も深刻な経済危機を経験しています。国際労働機関（ILO）によると、現在の失業者は世界中で数百万人にのぼり、全世界の労働力の3分の1に相当します。M. CHOSSUDOVSKY

(2003)によると、この世界的な危機は1930年代の大恐慌よりも壊滅的だという。「雇用の危機は、雇用の主観的な危機でもあり、どのような仕事にも就かず、どのような条件にもなじまないという人が増えています。雇用の危機とは、何よりもその内容の危機であり、商売が専門職へ、専門職が今日では識別が困難な輪郭を持つ職業へと大規模に変化していることである」（BOUTINET, 1990,

p.116）。1960年代の闘争が社会的不正義によって決定されていたとすれば、今日の闘争は、失業、雇用の不安定さ、職業キャリアの不安定さに対する闘争によって方向づけられています。現在の紛争は、何よりも不確実性と、雇用や企業の存続に関わる複数の脅威の出現に関連しています。これらの脅威は、定義が不十分で、その輪郭や原因が不明です。毎週のように、多国籍企業が世界規模での人員削減や、ある国から別の国への工場移転などを発表しています。今日、私たちが直面しているのは、「相対的に固定された不動の宇宙」、つまり官僚的で階層化された宇宙（30年前にR.Sainsaulieuが1977年に提唱したもの）ではなく、階層化されておらず、予測不可能で絶え間ない変異の中にある宇宙であり、その中で労働者は既存の仕事をめぐって互いに競争するように導かれている。

このような状況の中で、仕事や仕事における自分自身についての新しい表現は、自分自身を管理するという課題と結びついています。「ますます、労働人口や大多数の知識労働者は、自分自身を管理しなければならなくなるでしょう。新しいキャリアの視点が構築されています。

- 従業員は、不確実性に基づく枠組み、つまり、大きくて安心できない変化に直面しています。しかしその一方で、企業は人的資本に投資したいと考えています。
- このような状況下では、新しいキャリアの視点や、仕事と労働生活の新しい表現（企業間の移動、仕事の種類の移動）が組織されます。
- 会社が大切なプロフェッショナルのキャリアを管理する体制から、そのプロフェッショナル自身が自分の雇用を管理する体制への移行です。

²⁵ 2007年3月8日付 *Visão*, No.731, p.78 ff. を参照。

確かに今日、「専門職・管理職」という非常に異質なグループは、自分たちに有利にも不利にもなるいくつかのタイプの現象の影響を受けているにもかかわらず、比較的恵まれた環境にある。

- 教育の民主化のおかげで、その数は増えましたが、同時に相対的に切り下げられました。
- 彼らの訓練は非常に一般的なもの（数学、物理、技術）であり、特定の職業ではなく、主要な機能に割り当てられていた。
- 彼らの主要機能間の移動性は、特にスーパーリーダーの機能に備えるために必要です。
- そんな中でも、人材マネジメント、マーケティング、ファイナンスなどの新しい分野を生み出してきました。
- 指揮系統が長くなり、技術者が上からの命令に従うスーパー技術者になってしまったのだ。
- オーバーシックスティーズを解放することで、キャリアの長さを短くする。
- 技術者の増加は、管理者の機能を低下させ、彼ら自身が商売をしているとみなされます。卒業証書、スキル、ネットワーク、自分の仕事を作る能力（特にコンサルタント業）、高額な給料のおかげで、自分の仕事に投資することができる資本力を持つ、非常に大きな労働市場。しかし、それだけでは失業してしまう。最後に、専門職や管理職のスタッフがある種の利点（毎月の給料や有給休暇）を失ったとしても、彼らの「専門職としてのアイデンティティ」は他の従業員よりも脅かされることはありません。

今日、従業員、管理者、技術者、労働者が直面している課題は、不確実性と変化に対処する必要性につながっています。このような現実直面すると、彼らは個人的なリソースを動員する必要がある、同時に、崩壊しつつある社会的・職業的な結びつきを再構築し、連帯感と創造性を発揮する手段を増やす必要があります。

1960年代には、プロフェッショナル・アイデンティティは非常に強い集団的な側面を持っていましたが、現在では深い個人主義的な傾向が見られます。²⁶このような予測不可能な状況下では、コンピテンスという概念が、成功を収めるために、またプ

26

P&MSはその地位を集団で「交渉」してきたが、彼らが常に非常に個人主義的であり、ワークフォースマネジメントの「ツール」（例えば、ヘイシステム）を拒否してきたことは事実である。一方で、他の社員に個性的な方針を求め、適用したのは彼らだった。しかし、イデオロギーとしての個人主義は、すべての社会的行為者に関わる個人化のプロセスと混同されるべきではありません。もちろん、出来事や状況、生産における効率性の圧力との関係においてです。

ロフェッショナルとして成長するために中心的な役割を果たします。能力があるとは、資格があり、職業上の制約の要求を満たすことができることです。そして、自分のキャリアを管理し、自分の雇用可能性を確保する責任は、P&MSにあります。これまでは会社がやっていたことを、これからは個々のP&MSがやるべきです。これが今の企業の声であることは間違いない。しかし、経済・金融危機とP&MSの失業率の大幅な上昇により、彼らはこの「自己管理」を達成することができません。その他の従業員については、レベルに関係なく資格を認めることの難しさを知っています。そのため、自分の雇用可能性を管理する能力が損なわれてしまう。

IX. プロフェッショナル・アイデンティティのシステムと、それを組織するプロセス

。

プロフェッショナル・アイデンティティは、システムとして複数のプロセスを経て発展していきます。

- **所属とは**、自発的な登録行為を意味し、社会的なつながりを通じて社会的専門家集団にアクセスするプロセスを意味し、帰属意識と社会的認知の出現と維持を促進するものである。アイデンティティの構築は、帰属と関係性のプロセスとして行われる（DUBAR, 2002）。このグループは、自分の「直観的な知識」（SAPIR, 1967）に影響を与え、自分を「他の人と一緒に考え始める」（HALBWACHS, 1950）ように導き、「メンバー間の関係を支える共通の象徴的コード」（PERCHERON, 1974, p.32）の共有を促します。
- そのため、プロフェッショナルとしての自己表現を変革するプロセスに関連して、行動の**再編成**が常に必要となる。エグゼクティブの職業上のアイデンティティの構築は、「職業上の世界」の表現を発展させ、「その人が関係を持つさまざまなグループの価値観」を獲得することと関連している（PERCHERON, 1974, p.26）。このような価値観の表現と統合は、「社会的専門家のカテゴリー」に関連した専門家の行動と選択に反映されます。
- **クオリフィケーション**（資格付与、能力認定）は、資格を得るための訓練を受ける過程（能力の獲得）と、自分の能力の価値を判断し、それが意味する自己価値を判断することを組み合わせたものです。「仕事の分野における典型的なアイデンティティの構成は、抽象的には理想的な職業人としての経歴の特権的な「瞬間」と関連付けることができます。初期の職業訓練に伝統的に対応するアイデンティティ構築の瞬間 [...]、貿易チャンネルでの挿入と資格の漸進的獲得に関連するアイデンティティの統合の瞬間 [...]、企業チャンネルでの責任へのアクセスによって習得されるアイデンティティの認識

の瞬間 [...]、アイデンティティの高齢化と退職への漸進的通過の瞬間」 (DUBAR, 2002, p.238).

資格の基礎は知識に基づいており、トレーニングや経験を通じて獲得した知識であるため、資格取得のアイデンティティは、専門家としてのアイデンティティを構成する知識とも関連しています。学んだ知識は、理論的な知識、技術的な情報、専門家の訓練に不可欠な理論的な知識と結びついています。構築された知識は、学んだ知識を実際に適用して検証することで得られます。統合された知識とは、理論、実践、そして経験の個人的な精緻化を含むものであり、その結果、個人的な能力、すなわち、様々な実践の中で実現される自己認識の構成要素が開発されます。

コンピテンスは、他のサブシステムと常に関係している横断的なサブシステムであると言えます。それは、職業上のアイデンティティを差別化し、価値づける要素ですが、対象者が直面している、あるいは直面しなければならない職業上の課題や危機的状況と密接に関連しています。「現在、職業活動はコンピテンシーを通して分析されており、コンピテンシーは職場での人々の有効性を測定する道具となっています。また、コンピテンシーは個人が自分の行動を表現する際にも影響を与えます。[...]コンピテンスは、仕事との関係を大きく変化させるベクトルでもあります。この点で、結果の評価、移動基準の個別化、責任の増加を組み合わせた「能力の論理」について語ることができます。また、そうすることで、獲得した知識のプロセス（トレーニング、卒業証書、経験）の認識と分類のための基準の整理を中心とする「資格の論理」を引き継ぐことを主張しています (NALLET, EVEQUOZ, 2000, p.78)。

- **移行は**、変化と進化のプロセスとして、基準となる社会的専門家グループの能力を獲得することと関連していますが、変化の段階を管理し、変化の段階に関連する状況、ストレス、態度をコントロールする必要があります。それは、プロフェッショナル（個人的な歴史、トレーニングの経過、自己表現を含む）と、人々やグループ、機関との交流、プロジェクトの推進、課題への対処などを求められる社会的・職業的な状況の現実との出会いから構成されるプロセスです。
- **Valorisation**は、知覚された有能感と自分の価値に対する個人的な認識（自尊心）を反映しています。バロリゼーションは、同時に展開する2つのベクトルを含むプロセスです。一方では、資格（コンピテンス）の形成的・発展的な経路で、自分と自分の知識の価値を（自分でも他人でも）認識し、帰属意識に関連して、専門的な経路に統合されているという感覚（所属）を持つ。一方で、自尊心の構造化とプロフェッショナルとしての自分の価値の内部表現は、プロフェッショナルな遍歴の中で課題に直面する能力（対処戦略）、リスクを取る能力、日々のプロフェッショナルな状況に質と厳しさをもつ

て対応する能力につながります。もちろん、「挑戦」という言葉は、会社での予測できない事件やリスクのある決定を正当化するために使われると、イデオロギー的な意味合いを持つことがあります。しかしそれは、家庭の社会的地位に関係なく、子どもや若者、あるいはスポーツ選手が年齢に関係なく身につけている、リスクに直面したときに自分を超越、自分を大切にするという戦略にも関係しています。それは、自分を超越するという英雄的な戦略（勇敢な心に不可能はない！）、社会的・文化的な外的決定論のドラマチックな戦略（出身地によって、ある種のドアは常に閉ざされている）、そして、アマルティア・セン²⁷の能力の戦略であり、そこでは、私たちの自由（ポジティブなものもネガティブ²⁸なものも）は私たちの行動と関連づけられている。センの「ケイパビリティ」は、俳優が自分の思い通りに生きられる自由と結びついている。重要なのは、彼が自由に使える財ではなく、その財によって彼が自分自身を満たし、自分が選んだ人生のプロジェクトを遂行する方法なのです。センは、イザヤ・バーリン（1969年）が提唱し、ロナルド・ドワーキン（1995年）が再構築した正負の自由の理論を利用している。

積極的な自由とは、他者、特に制度からの制約を受けずに、すべてを考慮した上で、その人が達成できること、実現できることを表します。積極的な自由の中でSenが興味を持っているのは、権利と、それを現実の資源に転換する能力です。否定的な自由は、国家、制度、グループ、その他の人々からの制約がないことにのみ対応しますが、これも重要なことです（！）。この（負の）自由は、非人間的な労働条件や疎外的な生活環境（個人的または集団的）からの自由と関連付けることができる。

X. プロフェッショナル・アイデンティティの次元

プロフェッショナル・アイデンティティは、他のアイデンティティ・システムと同様に、3つの次元を含んでいます。

- 資格と認識を取り入れた **Qualifying Identity**。

クオリフィケーションとは、能力の獲得だけでなく、能力²⁹があることを認識することにも関係しています。認識とは、他者や自分自身が能力を認識すること（自己評価）につながります。アイデンティティは、能力開発の個人

²⁷ Sen, A. *Rethinking Inequality*. Paris, Seuil, 1992. Sen, A. *Identity and Violence*, Paris, O. Jacob, 2006. センが定義する「ケイパビリティ」という言葉は、capacityともcompetenceとも訳せません。ポール・リクールや他の翻訳者と同様に、私たちはそれを「能力」と訳します。

²⁹ リクールは『P』でアマルティア・センのケイパビリティ理論を取り上げた。Les parcours de reconnaissance, Paris, Stock, 彼はこの「できることの認識」という表現を使っています（「能力」とリンクしています）2004。

的な経路、トレーニングと能力の認識の軌跡、そして組織によるこの認識を反映したキャリア全体の進行にも結びついています。

一般の従業員、特に若い従業員は、自分の職業的アイデンティティのこの側面に真剣に投資しています。インタビューを受けたある若手マネージャーは、「キャリアの始まりであるこの時期に、私にとって重要なのは、新しい知識、新しい経験、それに伴うチャレンジという意味で、何を学べるかということです。新しい知識を得るという観点からはあまり面白くなく、やりがいのない仕事をして月に1500ユーロを稼ぐという仮説と、多くのことを学び、新しい知識と責任を身につけることができる面白い仕事をして月に1000ユーロを稼ぐという仮説では、私は2番目の仮説を選びました。新しいスキルの開発は、新しい統合された知識とともに、それ自体が投資であり、プロフェッショナルの資格と知識資本を強化し、増加させるものであると考えられています。

- **カテゴリー的なアイデンティティ**とは、会社や職業集団で期待されている行動、態度、表現を持っているという帰属意識を統合したものです。それは、より一般的なカテゴリー（マネージャーなど）に属していると認識されているという感覚と関連しています。職業上のアイデンティティは、所属するカテゴリーの考え方とも関連しており（DUBAR, 2000）、INSEEが構築した社会的職業のカテゴリーとも頻繁に関連しています。このカテゴリーは、エミール・デュルケムが「行動、感情、判断の方法」と呼んだ、何か共通点を持ったある数の個人の人生の典型的な側面を全体的に集約したものです。
- **統合的なアイデンティティ**とは、所属（社会的専門家グループの活動に参加するプロセス）と統合（社会的専門家グループやコミュニティ・グループにおける統合的な構築と関与のメカニズム）を結びつける、認知的かつ感情的な構成要素である。

これらの次元は、社会的・職業的成功と密接に関連しており、その成功は、内的・対人的評価（自尊心）や、防衛（防御）・適応（対応）のメカニズムと関連しています。

XI アイデンティティと個人的・職業的成功のモデル

人間は誰でも、自分にとって大切なことを実現したいと思っています。しかし、すべての願望が自動的に実現されるわけではありません。人が有能になっていく過程は、自己³⁰評価と外部評価が連動しています。フィードバックを受けた本人は、他者

30

トレーニングをほとんど受けていない集団の中には、自分から一歩引いてみるのが難しく、そのため自己評価のスキルを効果的に使えない人もいます。

からの評価に反応して自分の評価を修正し、自分の弱点と強みを把握していきます。自己啓発、学習、自己修正の試行錯誤を経て、弱点が強みになる。しかし、成功³¹とは、単に能力を感じていることだけではなく、知覚された価値（自尊心）、責任に伴う知覚された課題（複雑さ）（課題の性質と複雑さ）、スキル（知識、ノウハウ、対人関係スキル）、対処法、レジリエンスなどの総合的なものから生まれるものです。これに、自分自身のキャリアを管理するための評価と実用性を加えたものです。しかし、これらのプロセスは背景や労働条件とは無関係ではなく、大きな健康問題を引き起こすほど悪化し、時には自殺に至ることもあります。

Dubar (2000)

は、個人が職業上の活動も含めて、理想化された人物やキャラクター（英雄、賢者など）と同一化すると考えています。現在の状況では、「様々な専門家がどのようなヒーロー、どのような参照モデルに共感しているのか」という疑問が生じます。成功やプロとしての成果の表現は、集団的な影響や相互作用を伴う個人の精神的構築物です。この構造では、個人が自分のニーズ、個人的なプロジェクト、教育上の参考資料、資格、自分が人として成長してきた文化などを考慮に入れます。この精神構造は、特定の文脈、特定の社会的現実（企業、経済、グローバル化、競争力の要求、雇用の不安定さや不安定さ）の中で、職業人としての自分を表現することと密接に関連する特徴を持っています。不確実性と要求（機能、責任）を管理する必要性は、対象者がすでに身につけている、あるいは迅速に開発しなければならないスキルに直結しています。

個人やプロの成功のモデルを提案することは、疑問やリスクがあるように思えるかもしれませんが。これは、理想化と規範的正当化のプロセスの一部であり、社会的行為者を行為の真の必要性から遠ざける可能性があるとして批判されることがあります。しかし、この理想化のプロセスは、程度の差こそあれ、すべての社会的アクターにおいて、さまざまな価値観や信念の体系（宗教的、政治的、哲学的など）に依拠して働いていることを示すことができます。さらに、このプロセスは、現実的な実現という逆のダイナミクスと相互に作用する。日常生活では、プロジェクトや夢、実現のための緊張感を通して、実践の理想化と理想の実践の間を常に行き来しています。さらに、社会的行為者は、自分の行動、基準となる価値観、状況における自分自身の表現を変えることができる適応行動（生物学的・心理学的・社会的）を使用します。しかし、これらの行動は、規定された社会的に期待されるアイデンティティを引き受けることを可能にしますが、同様に決定される内外の評価と認識の必要性に直面することになります。

31

成功するかどうかは、経済的・社会的な背景のほか、恣意的な基準で目標を設定する人の能力にもよることは明かです。

これらの4つのプロセス（理想化、現実化、適応、認識）は、個人のアイデンティティと同様に、職業上のアイデンティティの構築と維持に大きな役割を果たします。

結論

AFP通信の記事によると、「2006年10月20日、ナンテールの社会保障裁判所（TASS）は、Guyancourt（Yvelines）にあるルノー・テクノセンターの本館5階から自殺したコンピューター・エンジニアのAntonio

Bさん（39歳）について、ルノーの「理不尽な過失」を非難した」とのことです。彼の家族は、ルノーが安全上の義務を果たしていなかったことと、従業員が受けていた職業上のストレスが彼の行為の直接の原因であると考えています。

アントニオ・B氏の未亡人であるB夫人は、「3年以上の戦いを終えて、大きな安堵感、大きな満足感を得ています。ようやく夫に正義が下されました。彼らは、彼が苦しんだこと、ルノーのために耐えたことを認めているのです。これが、収益性のためにすべてを犠牲にするすべての企業に対する強いシグナルとなり、従業員にとっては、正義が彼らの味方であることを知ることになることを願っています。メディアに取り上げられるような事件だけではなく、どこにでも故障する人はいるものです。これは、彼らに「頭を上げろ」という強いメッセージでもあります。

その一方で、一家の弁護士であるレイチェルSはこう語っている。「私が望むのは、すべての決定の中心に人々を戻すべきだということが、ようやく受け入れられるようになることです。つまり、人の行動を説明するのに、人の弱さを持ち出すのはやめなければならないということです。

ラ・フォンテーヌは「Les animaux malades de la peste」の中で、「権力者が惨めな者かによって、裁判所の判決はあなたを白人にも黒人にもする」と書いています。幸いなことに、これは必ずしも真実ではありません。TASSの決定は、正義を重んじると同時に、どこから来ようとも不正を拒む必要があることを確認した。マックス・ガロは、小説『*L'oiseau des origines*』（パリ、ラフォン、1974年）の中で、次のように述べている。「私たちを生み出すのは、常に拒絶である。私が拒否をさらに進めたいと思ったのは、拒否が自分自身と他者の征服であることを発見したからです」（1974年）。アラン・トロローヌも、社会運動における、また社会運動を通じた反対運動の重要性を主張しています。「拒否のジェスチャー、抵抗のジェスチャーこそが、主体を生み出す」（1993年）。アイデンティティが対立によって主張できるという事実は興味深い。少なくとも、アクターが自分の感情や不安をコントロールする手段を持っている限りにおいては、自分を破壊することなく葛藤を生き抜くことができ、暴力で自分を見失うことなく自分の主張に意味を与えることができるが、これは極度の制約のある状況では必ずしも容易ではない。

ここでは、象徴的構成主義の父であるジョージ・H・ミード（1934, tr.fr.2006）が、（自発的な）「私」と「自我」（社会的アイデンティティに近い慣習的な形態）の対立を喚起する方法を見つけることができます：「ある領域では、個人は自分自身を主張することができる。特定の権利は、（一定の）範囲内で認識されます。しかし、緊張感が高まりすぎると、この限界が守られなくなり、個人が暴力的に自己主張するようになります」（Op.cit p.269）。ここで、暴力は他人に対してだけでなく、自分自身に対しても向けられることがあると付け加えることができます。もちろん、不正や侮辱、他者からの尊厳の否定などに反発した結果であることもありますが、被害者意識と結びついていることもあります。しかし、それは、自分が優れた集団に属しているという事実によって正当化される、自己優越感と結びつくこともあります（人種差別、性差別など）。しかし、このグループ内での優越感、肯定欲求が「機能的な表現を見つけたとき、それは完全に正当なものになる」。この力が私たちを有効にしてくれます。自分のオリジナリティを主張できること、それが望ましいことなのです」（Op.cit p.267）。アクセル・ホンネは、「法的に保証された自由の空間が増えることで、個性の可能性が解放される」（*The struggle for recognition*, 2008, 102）という事実を語るとき、ミードに同意しています。ポール・リクールの最新作『*Parcours de la reconnaissance*』（2004年）のタイトルとの違いに注目してみよう。ホンネはヘーゲルの認識のための闘争の理論（『精神の現象学』1807年、仏語新訳、2006年）に依拠しているが、リクールは認識の複数の意味を解き明かしているのである。

また、SAINSAULIEU³²は、労働者のアイデンティティ・ダイナミクスを理解し説明するために、「主人と奴隷」というヘーゲルの弁証法に依拠しています。ヘーゲルによれば、自己の認識につながる弁証法の始まりは、対象物への欲求である。このようなモノへの欲求の動きの中で、主体は他の主体の競合する欲求に出会う。そして、2つの絶対的な欲望の間で「死闘」が繰り広げられる。認められるためには、自分の認められたいという気持ちを忘れて、相手の認められたいという気持ちを受け入れる必要があります。Sainsaulieuはこのモデルを用いて、個人のアイデンティティの構成が社会的（職業的なものを含む）関係に深く埋め込まれていることを示しています。この闘争から勝利を得ることによって、主体は認識され（そして自分自身を認識し）、疎外された立場から逃れることができる力の手段を手に入れることができるのです。「アイデンティティを形成する社会的状況をよりよく理解するために、自分自身であるための力についての社会学全体を発展させることができるだろう」（1977年、p.327）。

³²Sainsaulieu（1977）では、第8章（職場における集団的アイデンティティと自己認識、pp.302-343）全体を参照しているが、特に彼の「自己認識に関するヘーゲルのスキームの再読」、pp.319fを参照してほしい。

逆に、ポール・リクールにとっては、対立を克服するために対立に直面する必要性は最小限に抑えられ、行動、合理的な能力、複数の認識の関係が優先されています。彼によれば、自分や他人が自分のアイデンティティを認識することは、道筋（言語的、哲学的、心理学的）の観点から研究することができます。彼は、認識のさまざまな意味の順序を提案しています。識別としての認識（何か、または誰か、その人のアイデンティティを認識する）から、感謝としての認識（歓迎された方法に感謝する、価値を与える、または受け取るなど）を経て、自己認識（アイデンティティの構築または再構築、能力の充当³³）と相互的な間主観的認識（愛、権利、社会的評価）を経て、認識のさまざまな意味を説明しています³⁴。

つまり、主要な問題は、リベラルな資本主義によって回復された個性化³⁵と個人主義の間の混乱であり、それは、アラン・エレンバーグの表現（1998年）によれば、「自己疲労」を生じさせ、制度的または関係的な制約の結果として、自己実現（これはイデオロギーとなっている）を達成するための一般的な圧力の影響として、うつ病が定着しているのです。このような産業保健と成功のイデオロギーの限界との関連性は、例えば、アクセル・ホネス³⁶の「資本主義と自己実現：個性化のパラドックス」の分析に見ることができます。シンメル（1983）に倣って、個性化の概念は次の4つの異なる現象に適用されると言及しています。1.個人の進路の個性化、2.行為者の孤立化（軽蔑や無関心の社会で）、3.反省の能力の向上、4.より大きな真正性の肯定（2006年、p.308）。

したがって、通常、主観化、個人の単一化、個人のアイデンティティの構築と関連している個性化は、矛盾したアイデンティティによって常に養われていることがわかります。これらのアイデンティティは、最初は経験を最適化するという意味で仮定されますが、その後、対象者は自分自身を感じ続けるために放棄しなければならず、また、他の人になるために変身することを義務付けるプロジェクトを再開するために放棄しなければなりません。

長引くであろう現在の危機的状況において、「『悪人』が全力で富を独占し、『善人』が組織的に奪われるようなマニッシュな言説や、『怠惰で堕落した悪人』が自業自得でしかなく、『勇敢な労働者』が努力に応じて報われるような言説に甘んじることはできない」（Vincent de GAULEJAC and Isabel TABOADA-LEONETTI, 1994, p.112)のです。そのため、汚名を着せるような意見の主張からは少し距離を置くこと

33

実際、リクールは、ここで私たち自身がそうであるように、アマルティア・センの仕事を参考にして、「能力」の理論を考慮に入れています。

34 リクールはこの三部作をHonneth（2004, p.295）から明確に借りている。

36 Honneth, 2006, pp.305 - 323.

が大切です。私たちは、アイデンティティのプロセスが、逆説的だが必要な矛盾によって常に侵され、私たちの生き方を導いていることを見てきました。³⁷

Bibliography.

ALMEIDA, P., Rebelo, G., *A era da competência, um novo paradigma para a Gestão de Recursos Humanos e Direito do Trabalho* Lisboa, Editora RH, 2004,

ANTOINE, J. *Valeurs de Société et Stratégies des Entreprises*, Paris, Presse Universitaire de France, 1996,

ANTUNES, S., Personalidade e sucesso profissional, in *Emprego e Carreiras* suplemento do Semanário Expresso, Novembro, Lisboa, 2006, (p.8-9), 2006,

BEAUVOIS Jean-Léon. *La Psychologie quotidienne*. パリ、Presses Universitaires de France、1984年。

BELLIER Suzanne *Le savoir-être dans l'entreprise. Utilité en gestion des ressources humaines*; Paris, Vuibert, 2004,

BERGER Peter, LUCKMANN Thomas - *The Social Construction of Reality*; London, Doubleday, 1966; *La construction sociale de la réalité*; Paris, Méridiens Klincksieck, 1986,

,
BERLIN, Isaiah *Four essays on liberty*, 2nd ed. London, Oxford University Press, 1969,

BETTELHEIM, Bruno - 「極限状態における個人と集団の行動」。 *Journal of Abnormal and social Psychology*, 38, pp.417-452,

BETTELHEIM, Bruno - *Surviving*, Paris, Laffont, 1979,

BOUQUET Brigitte - "プロフェッショナル・アイデンティティ"; in BARREYRE J.-Y., BOUQUET B.(Directors) - *Nouveau dictionnaire critique d'action sociale*; Paris, Bayard, 2006,

BOUTINET Jean-Pierre *L'anthropologie du projet*, Paris PUF, 1990,

BRUNER Jérôme S., TAGIURI, Renato The perception of people, in G.Lindzey (ed), *Handbook of Social Psychology*, vol.2, Cambridge, Addison Wesley, 1954.P.634-654,

CAMILLERI Carmel, KASTERSZTEIN Joseph, LIPIANSKY Edmond-Marc, MALEWSKA-PEYRE Hanna, TABOADA-LEONETTI Isabelle and VASQUEZ Ana *Stratégies identitaires* ; Paris, PUF, 1990a, 232p.(Coll. Psychologie d'aujourd'hui)である。

³⁷ HonnethはAnthony GIDDENS

(1987)に基づいて、ある意図を意図的に実現することによって、その意図が実現される確率が実際には減少している場合に、矛盾は逆説的であるとしています(2006, pp.286-287)。

- CAMILLERI Carmel " Identité et gestion de la disparité culturelle : essai d'une typologie " in CAMILLERI Carmel, KASTERSZTEIN Joseph, LIPIANSKY Edmond-Marc, MALEWSKA-PEYRE Hanna, TABOADA-LEONETTI Isabelle et VASQUEZ Ana *Stratégies identitaires* ; Paris, PUF, 1990a, 232 p.(Coll. Psychologie d'aujourd'hui)である。1990b, pp.85 - 110,
- CASTEL Robert - "De l'indigence à l'exclusion : la désaffiliation"; in DONZELOT Jacques - *Face à l'exclusion.Le modèle français*; Paris, Editions Esprit, 1991,
- CAUSER, Jean-Yves, DURAND Jean Pierre & William GASPARINI *Les identités au travail. 分析と論争*. Toulouse, Octares, 2009,
- CHEVRIER J., FORTIN G., LEBLANC R., THEBERGE M. - "La construction du style d'apprentissage"; in *Éducation et francophonie.Revue scientifique virtuelle*, 2000, XXVIII (1) (Cf on Internet: <http://www.acelf.ca/revue>),
- CHOSSUDOVSKY M. - *A Globalização da Pobreza e a Nova Ordem Mundial*; Lisboa, Editorial Caminho, 2003,
- CLOUTIER Richard, GOSSELIN Pierre, TAP Pierre - *Psychologie de l'enfant* ; 2° édition, Montréal, Gaëtan Morin Éditeur, 2005,
- CODOL Jean-Pierre - *似ているようで違う。 Recherche sur la quête de la similitude et de la différence sociale* ; Aix-en-Provence, Université de Provence, 1979 (Thèse d'Etat),
- CODOL Jean-Pierre - "La quête de la similitude et de la différenciation sociale.Une approachche cognitive du sentiment d'identité"; in TAP Pierre - *Identité individuelle et personnalisation*; Toulouse, Privat, 1980, pp.162-181,
- CODOL Jean-Pierre - "Social differentiation and non-differentiation"; in TAJFEL H.(Dir.) - *The Social Dimension*; Cambridge/Paris, Cambridge University Press/Maison des Sciences de l'Homme, 1984,
- CRENNER Emmanuelle " Être retraité : quelle identity after le travail ?*Économie et statistique*, n° 393 - 394, 2006, pp.41 - 60,
- DESROSIERES Alain, GOY A., THEVENOT Laurent - "L'identité sociale dans le travail statistique.La nouvelle nomenclature des professions et catégories socioprofessionnelles"; in *Économie et Statistique*, n° 152, February 1983, pp.55-81,
- DORON Roland and PAROT Françoise *Dictionnaire de Psychologie*, Paris, PUF, 1990,
- DRUCKER Peter - *Management Challenges for the 21st Century*; New York, Harper Collins Publishers Inc, 1999,
- DUBAR Claude - *La socialisation* ; Paris, Armand Colin, 1991 ; 2nd edition, 2002,

- DUBAR Claude - *La crise des identités. L'interprétation d'une mutation* ; Paris, PUF, 2000,
- DWORKIN, Ronald *Taking Rights Sincere*. パリ、PUF、1995年
- EHRENBURG Alain - *La fatigue d'être soi, Dépression et Société* Paris, Odile Jacob, 1998,
- ERIKSON Erik H. - *Childhood and society*; York, Norton, 1950, (8) (tr.fr. *Enfance et société*, 1950 Neuchâtel, D & N.),
- ERIKSON Erik H., NASS Joseph (trans.), LOUIS-COMBET Claude (trans.) - *Adolescence and crisis: the quest for identity*; Paris, Flammarion, 1972, 348p.(Coll.Champs, n° 60)を参照してください。
- ESPARBÉS-PISTRE Sylvie, SORDES-ADER Florence, TAP Pierre - "Stratégies de Personnalisation et appropriation des compétences à l'adolescence: différences entre garçons et filles"; in L'ESCARRET O. LEONARDIS M.(de) (Eds.) - *Séparation des sexes et compétences*; Paris, L'Harmattan, 1996, pp.247-277,
- GAULEJAC Vincent de and TABOADA-LEONETTI Isabel *La lutte des places; Insertion et désinsertion*, Paris, Ed. de l'Épi, 1994,
- GAULLIER Xavier "Emploi, retraites et cycles de vie.*Retraite et Société*, n° 37, Paris, La Documentation Française, 2002, pp.166 - 207,
- GAULLIER Xavier *Le temps des retraites. Les mutations de la Société salariale*. Paris, Seuil, 2003,
- GIDENS Anthony 「社会の憲法」。構造化の理論の要素。パリ、PUF、1987年
- HALBWACHS Maurice *La mémoire collective*, Paris, PUF, 1950,
- ヘーゲル Georg W.F. *精神の現象学* (原版、1807年) Paris, Vrin (B. Bourgeoisによる翻訳) , 2006,
- HONESS TERRY M., YARDLEY, Krysia, *Self and Identity: Perspectives across the Lifespan*. ロンドン、ニューヨーク、Routledge & Kegan Paul, 1987.(Amazon Kindle Edition, 2007も参照)。
- HONNETH AXEL 「軽蔑の社会」。新しい批評理論に向けて Paris, La Découverte, 2006a,
- HONNETH Axel " L'autonomie décentrée " in F. Gaillard, J. Poulain and R. Schusterman *La modernité en Questions*. リチャード・ローティからユルゲン・ハーバマスまで。Paris, Cerf, 2006b,
- HONNETH Axel *La lutte pour la reconnaissance*, Paris, Cerf, 2008,
- HUTEAU Michel - *Cognition and personality. La dépendance-indépendance à l'égard du champ*; Paris, Laboratoire de Psychologie différentielle, 1981, (Thesis),

HUTEAU Michel.- *Les conceptions cognitives de la personnalité*; Paris, PUF, 1985,

HUTEAU Michel - 認知スタイルとパーソナリティ。 *La dépendance-indépendance à l'égard du champ*; Lille, Presses universitaires de Lille, 1987,

JANET Pierre *L'évolution psychologique de la personnalité*.(1929)
1929年にコレージュ・ド・フランスで行われた講義を、Miron Espteinが修正した速記録に従って完全に記述したもの。ダウンロード可能な書籍です第1版：パリ、エディシオン・シャヒーン、1929年テキストの再編集版：Paris: La Société Pierre Janet with the assistance of the CNRS, 1984, 327 p.,

KELMAN, Herbert C. "Compliance, identification, and internalization: Three processes of attitude change". *Journal of Conflict Resolution*, 2, no.1 (1958): 51-60,

KOGAN N *Cognitive Styles in Infancy and Early Childhood*, Hillsdale, NJ, Erlbaum, 1976,

KOLB David A. *Experiential Learning. Experience as the Source of Learning and Development*; Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, 1984,

LAGACHE Daniel " La Psychologie : conduite, personnalité, groupe " in Coll. *現代の医療の問題点*. Paris, Edition Médicale, 1951,

LEBOVICI Serge - "Le psychanalyste et l'étude des interactions précoces"; in *Revue française de Psychanalyse*, 1985, volume 49, pp.1307-1329,

L'ECUYER René - *Le concept de soi* ; Paris, PUF, 1978,

L'ECUYER René - "Les transformations de l'identité personnelle à travers l'évolution du concept de soi chez les adultes and les peopleagedes"; in TAP Pierre (Editor) - *Identité individuelle et personnalisation*; Toulouse, Privat, 1980, pp.53-60,

L'ECUYER René - "The development of self-concept through life span" in LYNCH M. D., NOREM-HEBEISEN A.A., GERGEN K.J.(編集部) ・ *自己概念. Advances in the theory and research*; Cambridge (Massachusetts), Ballinger, 1981, pp.200-218,

L'ECUYER René - *Le développement du concept de soi, de l'enfance à la vieillesse*; Montréal, Presses Universitaires de Montréal, 1994,

LEHALLE Henri - *Psychologie des adolescents* ; Paris, PUF, 1995,

LEYENS Jacques Philippe *Sommes-nous tous des psychologues ?*Brussels, Mardaga1983, ,

LEYENS Jacques Philippe, BEAUVOIS Jean Léon *社会心理学. L'ère de la cognition*, tome 3, Presses Universitaires de Grenoble, 1997,

LIPIANSKY Edmond-Marc - " Identité subjective et interaction " ; in CAMILLERI Carmel, KASTERSZTEIN Joseph, LIPIANSKY Edmond-Marc, MALEWSKA-PEYRE Hanna,

- TABOADA-LEONETTI Isabelle et VASQUEZ Ana *Stratégies identitaires* ; Paris, PUF, 1990, (Coll. Psychologie d'aujourd'hui) pp,
- LIPIANSKY, Edmond-Marc, TABOADA-LEONETTI Isabelle, VASQUEZ Ana, "Introduction à la Problématique de l'identité"; in CAMILLERI Carmel, KASTERSZTEIN Joseph, LIPIANSKY Edmond-Marc, MALEWSKA-PEYRE Hanna, TABOADA-LEONETTI Isabelle and VASQUEZ Ana *Stratégies identitaires* ; Paris, PUF, 1990, (Coll. Psychologie d'aujourd'hui) pp. 7-26,
- LORENZI-CIOLDI Fabio - "Discrimination between Self and others and social categorisation"; in *Revue internationale de Psychologie sociale*, special issue *Dynamique personnelle et identités sociales*, Toulouse, Privat, 1988, n° 2, pp. 239 - 256,
- MALEWSKA-PEYRE Hanna, TAP Pierre (Eds.) - *La socialisation de l'enfance à l'adolescence* ; Paris, PUF, 1991,
- MALRIEU Philippe - *Les émotions et la personnalité de l'enfant* ; Paris, Vrin, 1967,
- MALRIEU フィリップ - 「アイデンティティの導線の生成」 ; Pierre TAP (Editor) - *Identité individuelle et personnalisation* ; Toulouse, Privat, 1980 ; 2nd edition, 1986, pp.39-51 (Coll. Sciences de l'Homme),
- MALRIEU Philippe - "Milieux sociaux et genèse de la personne"; in *Enfance*, special issue *Hommages à René Zazzo*, 1996, n° 2, pp.134-142,
- MALRIEU Philippe - *La construction du sens dans les dires autobiographiques*.Toulouse, Erès, 2003,
- MARCIA, James E. "Identity and Self-Development" In Richard Lerner, Anne Peterson, and Jeanne Brooks-Gunn eds. *思春期のエンサイクロペディア* (Vol.1) 。 New York: Garland, 1991,
- MASSONNAT Jean, PERRON Jacques.- Pour une approche multidimensionnelle de l'identité de la personne」 *Psychologie française*, 1990, volume 35, n° 1, pp,
- MEAD Georges H. - *Mind, self and society from the Standpoint of a social behaviorist*, (1° edition 1934); *The mind, the self and society*.Paris, PUF, Le lien social, 434 p., 2006,
- MONTEFIORE Alan "Personal Identity and Cultural Identity" in F. Gaillard, J. Poulain and R. Schusterman *La modernité en Questions*. リチャード・ローティからユルゲン・ハーバマスまで。 Paris, Cerf, 2006, pp.211-229,
- MUSSEN Paul - "La formation de l'identité"; in TAP Pierre (Editor) - *Identité individuelle et personnalisation*; Toulouse, Privat, 1980, pp.12-21,
- NALLET F., EVEQUOZ G. - "Compétence et orientation professionnelle"; in BELLIER Suzanne (Editor) - *Compétences en action*; Paris, Editions Liaisons, 2000,

- OUBRAYRIE Nathalie, SAFONT Claire, TAP Pierre - 「Identité personnelle et intelligence sociale. A propos de l'estime de soi sociale"; in *Cahiers internationaux de Psychologie sociale*, Liège, 1991, n° 9-10, pp.63-76,
- PERCHERON Annie - *L'univers politique des enfants* ; Paris, Fondation Nationale des Sciences Politiques/Armand Colin, 1974,
- PINOL-DOURIEZ Monique - *Bébé agi - bébé actif. 相互作用経済におけるシンボルの出現* ; Paris, PUF, 1984,
- RAWLS John *Théorie de la Justice* Paris, Seuil, Points, 2009,
- RASMUSSEN David 「Rethinking subjectivity. Narrative identity and the self" in F. Gaillard, J. Poulain and R. Schusterman *La modernité en questions. リチャード・ローティからユルゲン・ハーバマスまで*. Paris, Cerf, 2006, pp.253 - 263,
- RICOEUR Paul *Parcours de la reconnaissance. 3つの習作* Paris, Stock/Galimard, folio Essais, 2004,
- RICOEUR Paul *Soi-même comme un autre*, Paris, Seuil Points Essais, 1990,
- ROGERS Carl Ransom - *The client-centered therapy*; Boston, Houghton Mifflin, 1951,
- SAINSAULIEU Renaud - *L'identité au travail* ; Paris, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, 1977 ; 3rd edition,
- SEN Amartya, *Identity and Violence. 運命の錯覚*. パリ、オディール・ジャコブ、2006年
- SEN Amartya, *Rethinking Inequality* Paris, Seuil, 1992,
- SIMMEL Georg "Individualismus", in *Schriften zur Sociologie. Eine Auswahl*, Frankfurt, 1983, pp.267 - 274.(Honneth, 2004より引用)。
- SORDES Florence, Esparbès Sylvie, Tap Pierre " Contrôle de soi et stratégies de développement : le coping en question ". *心理学と教育* (フランス学校心理士協会) , 16, 81-96.(www.pierretap.com document n° 112) をご覧ください。
- TAP Pierre 対人関係とアイデンティティの生成 *Annales de l'UTM. Homo XVIII*, 7-43, 1979 (available www.pierretap.com document n° 30),
- TAP Pierre (Editor) - *Identité individuelle et personnalisation* ; Toulouse, Privat, 1980a ; 2nd edition, 1986, 490 p.(Coll. Sciences de l'homme) 、 (Partially available www.pierretap.com, document n° 34/34b) 。

TAP Pierre (Editor) - *Identités Collectives et changements sociaux* ; Toulouse, Privat, 1980b ; 2nd edition, 1986, 490 p.(Coll. Sciences de l'homme).(www.pierretap.com, document n° 35/35bで一部公開されています)。

TAP Pierre - *La Société Pygmalion ?Intégration sociale et réalisation de la personne* ; Paris, Dunod, 1988, 263 p.(Coll. Organisation et sciences humaines).(一部利用可能 www.pierretap.com 文書 n° 80)。

TAP Pierre - "Personnalisation et conflits d'identité à l'adolescence"; in *Aprendizagem / Desenvolvimento: Revista internacional*; Lisbon, Institut Piaget, n° 10, 1990, pp. 77-84, (available www.pierretap.com document n° 93),

TAP Pierre - "Socialisation et construction de l'identité personnelle"; in Hanna MALEWSKA-PEYRE H., Pierre TAP (Eds.) - *La socialisation de l'enfance à l'adolescence*; Paris, PUF, 1991, pp.49-73, (available at www.pierretap.com document n° 100),

TAP Pierre, Esparbès Sylvie, Fsiian Hocine, Sordes-Ader Florence "Coping strategies and social desirability" Lisbon, *Aprendizagem Desenvolvimento*, Instituto Piaget, vol IV, n° 15-16, pp.165-173, 1995 (available www.pierretap.com document n° 126),

TAP Pierre, Esparbès Sylvie, Sordes-Ader Florence " Identité et stratégies de personnalisation " *Bulletin de Psychologie*, 428, L, pp.185 - 196, 1998 (available www.pierretap.com document n° 166),

TAP, Pierre, VINAY, Aubeline - "Dynamique des relations familiales et développement personnel à l'adolescence" in J.P.Pourtois et H.Desmet *Parent éducateur Paris*, PUF2000, pp.87 - 157,

TAP Pierre - "Enfance et Identité sexuée" in Richard CLOUTIER, Pierre GOSSELIN, Pierre TAP - *Psychologie de l'enfant* ; 2° édition, Montréal, Gaëtan Morin Éditeur, 2005, Chapitre 10, (pp. 277- 298 + corrigés 265 - 268 + bibliography).2005a,

TAP Pierre - " La construction de l'identité personnelle chez l'enfant " in Richard CLOUTIER, Pierre GOSSELIN P., Pierre TAP - *Psychologie de l'enfant* ; 2° édition, Montréal, Gaëtan Morin Éditeur, 2005, Chapitre 11, pp.299 - 322 + corrigés 468 - 470 + bibliographie.2005b,

TAP Pierre - "Identity and exclusion"; in *Connexions*, n° 83, 2005c, pp.53-78,

TAP Pierre - "Identity"; in Jean Yves Barreyre, Brigitte Bouquet, André Chantreau, Pierre Lassus *Dictionnaire critique de l'action sociale*; Paris, Bayard Edition 1996, pp.192 - 194.Jean-Yves Barreyre and Brigitte Bouquet *Nouveau dictionnaire critique d'action sociale*; Paris, Bayard, 2006, pp.293 - 295に再掲・修正されています。

TAP Pierre, ESPARBES-PISTRE Sylvie, SORDES-ADER Florence - " Identité et stratégies de personnalisation " ; in *Bulletin de Psychologie*, tome 50, n° 428, 1997, pp.185-196.(www.pierretap.com document n° 166) をご覧ください。

TAP Pierre, ROUDES Rolande, ANTUNES Samuel - "La dynamique personnelle et les identités professionnelles, en situation de changement" AFPA/INOIP, Lille (upcoming, 2010),

VANDENPLAS-HOLPER Christiane - 成人期および老齡期における心理的発達。 *Maturité et Sages.* パリ、PUF (Pédagogie d'aujourd'hui) 、289ページ、1998年。

WALLON Henri - "心理学の目標と方法" *Childhood*, 1-2, 1963, pp.5 - 71,

WALLON Henri - "Psychologie et éducation de l'enfance" *Enfance*, n° spécial, 1976 pp.3-433,

WITKIN H. A., GOODENOUGH D. R. - "Cognitive styles: Essence and origins" *Psychological Issues*, Monograph No.51, 1981,

ZAZZO René - 1980 " Les dialectiques originelles de l'identité " in Pierre TAP (directeur) *Identité individuelle et personnalisation*, Toulouse, Privat, pp.207 - 218.

=====